

使徒の働き15章11節 「恵みによる一致」

1A 主になられたイエス

1B 神の右に上げられた方 2:33

2B すべての名にまさる方 エペソ 1:20-22

2A 恵みによる救い

1B 王の好意を受ける者 エステル 5:1-3

2B 捨てられた赤子を女王にする方 エゼキエル 16:1-14

3B 受けるに値しない祝福 エペソ 2:1-10

3A 異邦人への同じ恵み

1B 改宗(律法の行い)による救い

2B 隔ての壁

3B 十字架の死による平和

4B 聖霊傾注の祝福

本文

使徒の働き 15 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 14 章まで来ました。今日は午後に、15 章を一節ずつ見ていきます。今朝は 11 節に注目したいと思います。「**私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。**」

15 章は、使徒時代の教会において非常に重大な議論を書き記しています。それは、「異邦人がそのまま救われることができるのか？ユダヤ人が自分たちの仲間に異邦人を受け入れることができるのか？」ということでもあります。もし、ここの使徒たちや長老たちの会議で、はっきりとした立場を聖霊によって決めなければ、今の私たちは、ここにいる人たちはみなユダヤ人ではないですから、救われる希望はないということになります。イエスを信じる信仰だけで救われるのか？あるいは、モーセの律法を守り、ユダヤ教に改宗することによって救われるのか？使徒たちが一致して、主から示されて、異邦人も恵みによって、信仰を通して救われるのだとしたのです。

人は、何とかして自分の行いによって救われたいと願っています。自分がまさか、自分に何も良いものがなく、全く救われようがないと認めることは、自分自身が許せないことです。罪と言っても、一回性の悪い行いではなく、全面的に墮落しているということを認めて初めて、信仰によってのみ救われることを知ることができます。このことを話しているのは、キリスト教のみです。イスラム教は善行による救いを教えています。ユダヤ教も、律法を守り行うことによって神の国における永遠のいのちを教えています。それに対してキリスト教は、良い行いのために救われますが、行いによって救われるのでは決してないことを教えています。キリストが行われたことに、自分自身をお任

せて、この方の名によって救われるのです。

けれども、人はどうしても、行いによって何らかの功績を上げたいと願っています。それで、信じるだけではだめなのだ。信じてから、行いによって救いを達成するのだと教えます。キリスト教の中でもそれを教えていく人々があり、それは異端の教えとして断じることができます。パウロが言いました、「ガラ 2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」

15章 11節は、ペテロがエルサレムの教会における議会の中で語った言葉の最後の部分です。アンティオキアの教会のところに、ユダヤ地方からやってきた者たちが、「15:11 モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていました。それで、パウロとバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、この問題について、使徒たちと長老たちと話し合うためにエルサレムに上って行ったのです。

エルサレムでは、彼らは迎え入れられました。神が異邦人に対して行ってくださったことを報告しました。すると、パリサイ派の者で信者になった者たちが立ち上がり、「15:5 異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである。」と言ったのです。それで、多くの論争が起りましたが、ペテロが立ち上がったのです。彼が、コルネリウスの時のことを思い起こさせました。コルネリウスは割礼を受けていないのに、福音のことばを聞いて信じ、あの五旬節の時に聖霊が与えられたのと同じように与えられたのだと話しました。神は心を信仰によって清めてくださったのであり、ここにおいてユダヤ人と異邦人には何の差別もないのだ、と言ったのです。そして、そもそも律法は我々ユダヤ人でも負いきれない重荷となっていたではないか、それをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのですか？と問いかけました。そして、「**私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。**」と言いました。

1A 主になられたイエス

私たちは何度となく、「**主イエスの恵みによって救われる**」と聞いていますが、ユダヤ人たちがこの言葉を聞く、その重みを知らないといけません。ペテロは、「ナザレ人イエス」と言わずに、「**主イエス**」と言っています。ユダヤ人にとって、ナザレの町から出て来たイエスという男が、主となったということを意味しています。

1B 神の右に上げられた方 2:33

五旬節の時、初めに聖霊が弟子たちに注がれた時に、ペテロはそこにいたユダヤ人たちに説き明かしました。2章 32-36節を読みます、「32 このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。33 ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。34 ダビデが

天に上ったのではありません。彼自身こう言っています。『主は、私の主に言われた。あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。35 わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』36 ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

ユダヤ人にとって、イエスを主と呼ぶことは、イエス様がよみがえられ、天に上げられたということ。神に受け入れられ、その右の座に着かれたということです。そして、父の約束である聖霊を、子であるイエス様が注がれたのです。これを持って、イエスが主ともキリストともされたとペテロは話しています。かつてローマ帝国では皇帝を主と呼ばせていました。皇帝が神の位についていて、世界を治めている王であることを告白する言葉です。しかし、イエスこそが神の右の座に着かれた方で、あらゆる権威、主権、あらゆる名にまさる名が与えられた方だということです。イエスご自身が王であり、神ご自身であることを示すものなのです。

2B すべての名にまさる方 エペソ 1:20-22

エペソ人への手紙で、パウロが雄弁に、イエスが主となられたことを次のように言っています。「エペ 1:19-21 また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。20 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

このように、主イエスは畏れ多い王であり、神であられるのです。ユダヤ人たちがペテロの説教を初めに聞いた時に、心が刺されたのはこれが理由です。主ともキリストともされたイエスを、こともあろうに十字架にかけて殺してしまった、ということです。

2A 恵みによる救い

ですから、私たちは「**主イエスの恵み**」という言葉を書く時に、何か福袋が当たって得した、とか、そういったものではありません。王なるイエスご自身に好意をかけてもらっているということであり、畏れ多きことであり、「全く受けるに値しない好意を受けている」ということでもあります。特権と言ってもよいかもしれません。受けるに値しない特権を受けることになったということです。

1B 王の好意を受ける者 エステル 5:1-3

エステル記のことを思い出します。時は、ペルシア帝国の全盛した、クセルクセス王が治めていた時に、王妃にエステルというユダヤ人が選ばれました。首都スサには、彼女の従兄弟にあたるモルデカイが養父になって彼女の世話役になっていました。王に仕えていたハマンが、モルデカイに対して怒り、怒り憎むだけでなく、ユダヤ民族全体を根絶やしにしようと企てました。そのことを法令

として王から許可をもらうことに成功したのです。このことをモルデカイが王宮の中にいるエステルに伝えました。エステルがこう答えます。「4:11 召されてないのに奥の中庭に入って王のところに行く者は、男でも女でも死刑に処せられるという法令があります。ただし、王がその人に金の笏を差し伸ばせば、その人は生きながらえます。私はこの三十日間、まだ王のところへ行くようと召されていません。」けれども、モルデカイはエステルを励まし、また警告を与えました。エステルがなぜ、ペルシア中の若い娘の中から王妃として選ばれたのか。「4:14 あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

それでエステルは、三日三晩、自分自身も断食するし、仲間のユダヤ人たちに断食するように言いつけます。死ぬのを覚悟して王の前に出て行ったのです。すると、5章にこうあります。「5:1-3 三日目になり、エステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の奥の中庭に立った。王は王室の入り口の正面にある王宮の玉座に座っていた。王が、中庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を得た。王は手にしている金の笏をエステルに差し伸ばした。エステルは近寄って、その笏の先に触れた。王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何を望んでいるのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」王から好意を受けたのです。法令に背いているのですが、王は一方的にエステルに好意を寄せ、金の笏を差し出しました。そして、望んでいるなら、王国の半分でも、あなたにやれるのだが、と気前よく言ってくれています。

これが「恵み」であります。王なるイエス様から、一方的に好意を寄せられて、多くの物が与えられているということです。ヘブル人への手紙の著者は、こういったことを思い描きながら、次のように勧めているのです。「4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」神の恵みを受けるとは、畏れ多きことであり、喜びに満ちたことなのです。

2B 捨てられた赤子を女王にする方 エゼキエル 16:1-14

神が、どれほどの恵みをもって救ってくださったのかを、イスラエルに対して行われたことについてですが、エゼキエルの幻で見せてくださいました。16章の始めの14節に書かれていますが、かいつまんで話しましょう。一人の赤子が、野に捨てられていました。へその緒も切られておらず、水で洗ってももらえず、布で包まれることもありませんでした。自分の血でもがいていたのです。そこに、神が通りかかりました。憐れみをかけ、「生きよ」と命じたのです。

そして、神は野原の新芽のように、彼女を育て上げました。成長して、成熟して、乳房はふくらみ、髪も伸びましたが、丸裸だったのです。神は、衣の裾を彼女に広げ契りを結びました。結婚されたのです。それから水で洗って、血を洗い落としています。汚れたままで生きていたようです。それなのに、神は近づいて契りを結ばれたのです。罪の中で死んでいて、その罪でもがいているのに、神はそのまますを受け入れ、契約を結んでくださったということです。

そして、神は彼女に、綾織の衣服を着せて、履物をはかせ、亜麻布をかぶせ、絹物で覆いました。鼻輪や耳輪を着けて、頭には輝かし冠をかぶせました。彼女は金や銀で飾られ、上等の小麦粉や蜜や油を食べました。それで非常に美しくなり、女王の位に進んだ、とあります。「恵み」には、美しさ、麗しさがああります。全く受けるに値しない待遇を受けているところにある美しさです。

3B 受けるに値しない祝福 エペソ 2:1-10

パウロは、救いがいかに恵に満ちているかを、エペソ 2 章 1 節から 10 節で話しています。その一部を読みます。「2:1-7 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。3 私たちもみな、不従順の子らの中にあつて、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいましたその大きな愛のゆえに、5 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。6 神はまた、キリスト・イエスにあつて、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。7 それは、キリスト・イエスにあつて私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした。」罪の中の死んでいて、この世の支配者、すなわち悪魔の言いなりになって、後に神の御怒りを受けるべきはずだったのに、キリストと共に生かされ、なんとキリストにあつて天上に座らせてくださったのです。その恵みが、世々に渡って示されるためなのだと言っています。「慈愛」ともありますが、私たちがこれほど好かれる要素などなく、一方的に憐れみを受けただけなのです。

3A 異邦人への同じ恵み

このような恵みをもって、ユダヤ人たちは救われたのです。ペテロは次に、「**あの人たちも同じなのです。**」と言いました。ユダヤ人である私たちは、主イエスの恵みによって救われたのですが、異邦人の兄弟たちも同じなのですよ、ということです。ところが、異邦人の兄弟たちに今、割礼を受けて、モーセの律法を守らせて、それでもって救われるのだと、自分たちも負いきれなかった頸木を、彼らに強要しているのです。神の恵みによって救われていても、恵みの中に留まっていなかったのです。留まっているならば、同じように

人間とは不思議なものです。自分自身は神の憐れみを受けていますが、他の人には違うものさしを使おうとします。イエス様は、「マタ 5:7 あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けます。」と言われましたが、それは逆に言うと、私たちは憐れみに欠けていて、神からの憐れみを受けたがるが、人に対して憐れみを示すことをしていないということです。

1B 改宗(律法の行い)による救い

ユダヤ人は、神の契約の民であることが、神の国に入る、つまり救われると考えていました。で

すから、異邦人が救われるには、ユダヤ人になる、正確に言えばユダヤ教徒になる改宗の手続きを取らないといけません。割礼は、アブラハムの契約の中にはいる非常に大切な儀式であり、まず男性は割礼を受けないといけません。改宗のための水のバプテスマもあります。安息日を守り、祭りもあります。食物規定も大切です。その他、いろいろな戒めと規則があります。

ですから、異邦人で、イスラエルの神を敬いたいと願っている人々も、同じようにユダヤ人のように生きないと救われなかったと思っていました。人間は、そこに救いがあると思えば、そこにある規則や儀礼に従うなどして、それに自分を合わせて生きようとしますね。ツロにいたカナン人の女のことを思い出してください。彼女はイエス様の一行に近づいてきて、「マタ 15:22 主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます。」と叫び続けました。けれども、イエス様はガン無視です。一言もお答えになっていません。彼女は、それで「主よ、私をお助けください。」と言っています。その後、子犬はパンくずは食べるという答えをして、イエス様は彼女の信仰をほめ、娘はすぐに癒されました。けれども、カナン人の女は、なんとかイエス様の注意を引こうとして、他のユダヤ人と同じように、「ダビデの子よ。」と叫んでいるのです。ダビデの子というのは、以前、学びましたように、ユダヤ人の王であるダビデの子孫にキリストが現れることを意味していて、ユダヤ人がメシアに対して使っている呼び名です。彼女は分かり易く言えば、自分が救われたいと思ったので、クリスチャンぽいことを言って、やってみたということです。けれども、そのことに対しては、イエス様は無視されたのです。そうではなく、彼女の心からの信仰を見たかったのです。

2B 隔ての壁

このように、いろいろな規則が律法の中に、また彼らが解釈した様々な規則があって、それがユダヤ人と異邦人の隔ての壁になっていました。コルネリウスの家に入るために、主がペテロに、三度も幻を見せて、御霊で語りかけて、それで彼が勇気を出して入ったほどで、隔ての壁があります。その後にエルサレムにいる信者たちに、異邦人と一緒に食事したと非難を受け、そして今、モーセの律法を守らないと救われないとまでいう偽教師までも出てきました。

ここの箇所を学んでいたら、ある注解に興味深いギリシャ神話の話がありました。「プロクラスタスの寝台」という話です。プラクラスタスという盗賊が人間を捕えて来ては、鉄の寝台の上に寝かせ、その寝台よりも身体の短い者は引っ張って伸ばし、寝台よりはみ出してしまう大きい人間の場合には、出た分だけ切ってしまい、どうしても寝台と同じ長さにしなければ、承知しなかったということです。これは人間のありのままの姿です。自分の基準があって、それに他人を合わせないと気が済まないという癖です。自分の計りに合わないと、裁いたり、枠にはめ込もうとしてしまいます。

そのことがユダヤ人の中に、異邦人が救われたという話を聞いた時に出て来た思いであり、異邦人である私たちにもその罪の性質がありますね。人を自分の感覚や思いで判断したり、また、

他の人の考えていることに自分を合わせようとしします。それはどだい無理なことであり、神のご計画に合わないことであり、どんなに努力しても、必ず隔ての壁が出来ているのです。

3B 十字架の死による平和

その壁を作っている私たちが、そこにある高慢が崩されるのは、キリストの十字架です。「エペ 2:14-16 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」十字架の死は、私たちの高ぶりの死を意味します。そこには、自分には何ら救われるべき誇ることがないことを教えます。そして、罪による神との敵対関係もなくなりました。そこにあつて、すべての人が平等になっています。一つになっています。みながキリストの血にあずかり、みながキリストの裂かれた肉にあずかります。キリストの死が、隔ての壁のある両者を一つにするのです。

ユダヤ人にとっては、「隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました」ということは実感としてあります。律法に違反することによって、死ななければならないという報いがあります。しかし、キリストの死はそれらの違反のすべてが、この方においてその罰が満たされたのだということを教えます。律法が、キリストの死によって完成されたのです。その新しい神との関係の中に入れられたのですが、それは信仰によって救われた異邦人と持つ神との関係と同じなのです。それで、両者は一つとなっています。平和があるのです。

4B 聖霊傾注の祝福

そして、ユダヤ人たちにとって、何をもちて祝福なのか？を考えましょう。主イエスが恵みによって救われて、彼らに行ってくださいしたのは、「聖霊の降り注ぎ」です。先ほど読んだ 2 章 33 節です。「ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」自分たちが金持ちになることでも、なんでもなく、神の霊ご自身が自分を支配して下さり、神のご栄光、イエス様のご栄光の中にいること、それが霊的な祝福です。パウロが言いました、「ロマ 14:17 神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。」聖霊によって、やがて来る神の国の至福の前味をします。神の国には、キリストが王なので正義があり、平和が満ちています。喜びにあふれています。神の御霊が地上に満たされるからです。その祝福を、前もって私たちに与えてくださったのです。

その御霊によって、私たちは一つにされています。自分たちの基準ではなく、まさにキリストの基準の中に入れられています。ですから、キリストを王とし、その恵みに浴し、自分のために死んでくださった子羊の犠牲をいつも思い出し、その中で真実な一致を楽しむことができます。自分の基準がなくなったとき、その時、真実な平和の結びつきを経験できるのです。